

コメント

橋川 俊忠

今、お二人の先生からご報告をいただきましたが、それぞれ独立した観点からのご報告で、どのように関連付けてコメントをすればよいのか、正直に言ってとまどっているところであります。しかし、それでは話が進まないの、とにかくお二人のご報告に対して、それぞれのコメントを申し上げて、その上で、なんとか関連付ける方向を探ってみたいと思います。

まず、リュ先生のご報告についてですが、先生が「木ではなくて森を見る」とおっしゃったのがとても印象的でした。われわれプロジェクトの中で活動しているものは、とかく自分の研究テーマのみに集中して全体が見えなくなる、つまり「森ではなくて木ばかりを見る」ことになりがちだからです。そして、先生は、われわれのプロジェクトの目的が、バーチャル・ミュージアムの構築にあるのではないかと指摘されました。

たしかにわれわれのプロジェクトは、当初から新しい情報発信の技法を開発することをうたっており、今年からは、地域統合情報発信と実験展示の二つの研究グループを立ち上げ、新しい情報発信の実現を具体化することに着手しました。しかし、この試みは、正直に言えばまだ試行錯誤の段階であって、明確なヴィジョンを結ぶところまで到達していないのが現状です。そういう段階にあって、リュ先生のご報告は、われわれの試みに、明確な方向性を指し示すものとして大変示唆するところが多かったと思います。

ところで、先生の提起されたバーチャル・ミュージアムは、最近著しく発展し、今なお発展しつつあるIT技術を駆使したデジタル・アントロポロジー（アントロポロジーは、日本で言う民俗学・民族学の両方を含んだ概念として使われていると思いますが）の成果を基礎として構築され、それには三つのこれまでにない可能性があると思われています。

一つは、そこでは、「ライブラリーとミュージアムの結合」が可能だということ、もう一つは、「テクニクスとプラクティス」を表現できるということのことです。そして、情報が一方的に与えられるだけでなく、情報の双方向性が確保されるということでもあります。

現代のIT技術は、当面コストの問題を度外視していえば、視覚と聴覚で捉えうるあらゆる種類の情報を大量に処理し、データベース化することを可能にしました。そして、ことなる質の様々なデータを自在に結合させることができるようになりました。静止画、動画、立体映像、音声そして文字データがパソコン画面上で自由に結びつき、豊富なイメージを提供する。パソコン上では、実物展示の世界（ミュージアム）と文字データ（ライブラリー）の間の障壁は取り除かれることになったわけです。このことが、学問的知見をどのように広げていくことが出来るかは今後の課題であるかもしれませんが、少なくとも、様々な資料を扱う諸学問の成果をより説得的かつ具体的かつ分析的に提示することを可能にしていることは否定できないでしょう。

次に、こうした技術はまた、これまで写真や文字など固定した形でしか表現できなかったものを、「テクニクスとプラクティス」（これは日本語には訳しにくい言葉ですが、「技法と動き」とでも訳しておきます）のレベルで動的に表現し、分析することを可能にしています。たとえば、ある一つの道具に注目する場合、そのもの自体だけではなく、それが使われている状況・環境、使う人との関係、使い方、製作過程、他の同

種道具に関する時間的・空間的情報などすべて関連付けて記録し、表示できるわけです。このことによって、見る者は、一つの道具についての豊富なイメージを獲得できるだけでなく、研究者にとっても、もし多くの地域でデータベース化がされていることを前提にすれば、容易に比較する手段を手に入れることができることとなります。もっとも、そのためには、研究者や資料所蔵者が、明確な目的意識を持ってデータベースを構築しておく必要があります。

三つ目の双方向性の問題ですが、インターネットが双方向的なものであることはもはや言うまでもないことですが、この双方向性を研究の分野で生かしている実績はまだ少ないのが実情でしょう。リュ先生もご指摘のように、ウィキペディアに見られるように、ただ見られるだけではなく、そこに参加させることによってよりよい情報を集積することができるわけです。かつて、葉書によるアンケート方式で研究の基礎データを収集したことがあります。現代では、もっと多量かつ広範に、そして質の高い情報が得られる可能性が広がっています。ただ、集積された情報を選別し、管理する仕組みをどのように構築するかという問題は残されています。

以上のように、デジタル・テクノロジーとインターネットを組み合わせることによって、バーチャル・ミュージアムという情報の発信と集積の仕組みが実現され、そこに新しい知的環境が形成される可能性が広がっていることは、先生が指摘されたとおり誰も否定できないと思います。しかし、どうしても指摘しておきたい問題が一つあります。それは、実物の迫力あるいは想像喚起力とでもいうべき問題です。

先日、福島県立博物館で行われた夜具・衣類の展示を拝見する機会がありました。そこに、展示された幾重にも継が当てられ、擦り切れた跡が残る夜具や衣類を見たとき、その実物の持つ迫力に圧倒された覚えがあります。それを使用していたであろう人々の生活の光景が浮かび、様々な想像が広がっていきました。念のため申し添えておきますと、その生活の貧しさを思ったわけではありません。もちろん、貧しさもありますが、むしろ、物にたいする人々の心の持ち方を思わされたのです。人々の知恵や工夫や、あるいは美的感覚すらも想像させられたのです。そういう迫力は、バーチャルな世界ではおそらく感じられないでしょう。もし、バーチャルな世界に止まるだけになれば、実物に対するそういう感受性が失われることになるのではないかと。そうなれば、人間の生活や文化の最も根底的なところには、理解が及ばないのではないかとという危惧を覚えるのです。その点について、リュ先生のご意見をうかがいたいと思います。

次に、的場先生のご報告ですが、「知覚をめぐる哲学的諸問題」とサブタイトルにありますように、極めて抽象度の高いご議論で、非文字資料とは何か、そしてそれはいかに認識されるかという困難な課題に答えようとしたご報告でした。私のように即物的人間には難解すぎる感がありますが、理解できた範囲でコメントさせていただきます。

先生は、文字資料と非文字資料を「文法的コード体系」を持つものと、持たないものとして区別することを提案されています。このご提案は極めて重要だと思います。文字資料と非文字資料は、研究しようとする、あるいは観察しようとする対象（物であったり、現象であったりするわけですが）の性質に即して区別されるものではなく、対象を研究し、観察しようとする側から設定される区別であるからです。先生も例に挙げていらっしゃるように、文字は一定の文法的コードにしたがって配列されている場合には、文章として書き手によって決定された意味を表現し、伝えるための「文字資料」となります。しかし、その書き様、書体は、書き手の意志を反映するよりも、書き手も無意識であるような別の情報を表現する（例えば性格診断に使われるような）資料、すなわち非文字資料として分析されることとなります。逆に、絵画や写真あるいは伝達

手段として使われる太鼓の音のような場合、文字ではない資料ではあるが、書き手、撮影者、太鼓の叩き手が決定した意味をそれぞれのコードにしたがって解釈することが求められます。その場合には、文章を理解するのと、基本的には同じ方法が適用されることになります。

したがって、この区別は、資料に対する接し方の違いに関係してきます。たとえば、文字資料の典型ともいえる思想的著述を考えて見ましょう。ちなみに私は思想史を専門としていますので、そういう例を挙げるわけですが、研究者ないし読者は、できるかぎり忠実にテキストを読み、著述者の言わんとするところをできるかぎり正確に理解することに努めます。そのためには、著述の全体を対象とし、場合によっては著述が為された個人的、社会的、歴史的背景までも検討しようとし、著述の一部を切り取り、断片化した上で、解釈したり、評価したりすることは、できるかぎり排除しようとし、

それにたいして、非文字資料として分析する場合、事情はまったく異なります。たとえば『絵引』の場合です。『絵引』は、絵巻（物語絵巻としてそれ自身の決定された意味を持っているわけですが）の一部を任意に切り取り、絵巻の意味とはまったく関係のないところで、道具や動作をデータ化するために作られています。あるいは、景観、たとえば山肌に残る雪形です。それは何の意図も含まない自然現象そのものです。しかし、人間は、その雪形を農耕作業の開始の合図として理解するわけです。あるいは集合記念写真を考えてみましょう。記念写真ですから、それには記念写真としての意味があります。しかし、その写真は、衣装に着目すれば、服飾史の資料にもなるし、ある種の写真は政治学の分析対象にもなります。すなわち、意味は、対象の中に存在するのではなく、観察し、研究しようとする側が与えるものとして存在するわけです。この点が、文字資料にたいする接し方とは根本的に異なることになります。

このことは、リュ先生が、非文字資料はインプリシットであるといわれたことに関係します。インプリシットなもの、比較的意識化されることが少ないと言えます。しかし、人間の生活は、すべてが意識化され、イクスプリシットに意味を表現するものから成り立っているわけではありません。むしろ、そうした領域は、普通の人間生活のなかでは一部に過ぎません。非文字資料を研究対象として取り上げることは、インプリシットな領域をいかに意識化できる領域に引き出してこられるか、そしてそれを明示的に表現し、伝達することができるかにあると思います。そうすることによって、人間の生活や文化の理解の領域を拡大し、豊富化すること、これがこのプロジェクトの最終的目的ということになるのではないのでしょうか。

その場合、研究者、観察者の側が、いかに自分の分析視角を明示し、収集した素材を研究対象の資料として体系化したかを明らかにし、その資料を分析結果と共に情報発信していくことが求められていることはいうまでもないでしょう。

私のように、日頃は、古文書や思想的著作の世界に沈潜しているものの「傍目八目」的かつてな言い分とされるかもしれませんが、このプロジェクトに参加させていただいて、また今日のお二人のご報告をうかがって、刺激をうけたままに感想を述べさせていただきました。お二人の先生に、心より御礼申し上げます。